

## 『史記』『漢書』と漢代思想史研究

井ノ口 哲 也

### 1. はじめに

およそ学問とは、文科系と理科系に分けるものでなく、本来はその垣根を意識することなくトータルで行われるべきものである。しかし、日本では、少なくとも高等学校教育の時点で、主として大学への進路を見据えて、いずれかの道を選択することになっている。さらに、文科系に限って言えば、おおむね哲学・史学・文学（いわゆる哲・史・文）に分かれているが、これについても、本来は分けるべきではあるまい。高校生の時から明確に文科系の学問に慣れ親しんできた筆者は、せめて意識の面だけでも、こうしたセクショナリズムから脱却し学際的な一研究者でありたい、と思っではいるのだが、そのように思っていること自体、実は学問の既存のジャンル分けをかなり意識していることのあらわれなのかもしれない。そういうことを思い知らされることになった一冊の本を手にする機会があった。

その本とは、大木康著『『史記』と『漢書』——中国文化のバロメーター』（『書物誕生—あたらしい古典入門』シリーズ、岩波書店、2008年11月）である。『史記』と『漢書』は、いずれも漢代に記された、中国の正史に数えられる書物である。『史記』『漢書』の研究者として想定されるのは、ふつう漢代（とその前後の時代）を研究対象とする研究者（これ以降、「漢代研究者」と呼ぶ）か歴史学者あたりであろう。しかし、大木氏は、中国明清文学の研究者であり、また目録学や出版文化にも造詣の深い方である。大木氏が、『史記』と『漢書』に関する本を執筆するとは、少なくとも筆者にとっては、かなり意外であったのである<sup>1)</sup>。

どの人がどの書物について研究しようとも、もちろん自由である。そして、人

にはそれぞれ得意分野や守備範囲というものがある。後述するが、大木氏の本領が発揮されている複数の章は、漢代研究者では扱えないであろうテーマで書かれている。具体的に言えば、漢代研究者の一人として、筆者には、漢代研究者であれば『史記』と『漢書』の成立した2000年前の諸事情に気付きはしても、大木氏のように漢代から現代までの2000年間の流れの中で『史記』と『漢書』を捉えようとすることができるであろうか、という考えがあるのである。

そこで、本稿は、まず大木氏の本から学べる点（漢代研究者には不得手と思われる点）を把握したうえで、筆者の専門領域である漢代思想史研究に即して、大木氏のふれていない『史記』『漢書』を用いた従来の漢代思想史研究について紹介する。そして、いま一度、『史記』と『漢書』から両書の成立事情を確認したうえで、漢代思想史研究に従事する者が『史記』と『漢書』にどう対峙していくべきか、私見を記すことにしたい。

## 2. 大木康著『『史記』と『漢書』』について

本稿を起こすキッカケとなった大木氏の著書について、その内容を見ておくことにしたい。まず、この本の構成を示しておく。

### プロローグ

#### 第Ⅰ部 書物の旅路 『史記』と『漢書』の二〇〇〇年

##### 第一章 正史としての『史記』『漢書』

##### 第二章 『史記』と『漢書』のちがい

##### 第三章 司馬遷の生涯

##### 第四章 班固の生涯

##### 第五章 『史記』と『漢書』の読書史——『漢書』の時代

##### 第六章 中唐における『史記』ルネッサンス

##### 第七章 印刷時代の『史記』と『漢書』

##### 第八章 『史記評林』と『漢書評林』

##### 第九章 結び——東西の両横綱としての『史記』と『漢書』

## 第Ⅱ部 作品世界を読む 文字の背後にあるもの

### 第一章 歴史家の弁明——『史記』『伯夷列伝』を読む

### 第二章 劉邦は「逃げた」のか、「跳んだ」のか

### 第三章 『漢書』『古今人表』

### エピローグ

### 参考文献

次に、この本の内容を簡単に紹介する。

第Ⅰ部は、第一章は、「正史」についての説明が展開されているが、『史記』『漢書』については「司馬遷が『史記』を、班固が『漢書』を著した時点では、それらは正史ではなかった」（11頁）と述べている。第二章は、『史記』と『漢書』における構成・歴史叙述の範囲・文体・思想の違いを比較考察している。第三章・第四章は、題目のとおり、であり、省略する。第五章は、木簡・竹簡・帛書から紙の時代になった後漢時代から唐代初期にかけては『史記』よりも圧倒的に『漢書』が多くの読者を獲得したこと、第六章は、中唐の韓愈以降は『史記』のほうが高く評価されるようになったこと、を説明しているが、その理由として、『漢書』への嗜好は、貴族時代、駢文という嗜好とワンセットになっていた」（82頁）のに対し、科挙官僚層の代表の一人であった「韓愈が『史記』を持ち上げ、古文を主張したのは、貴族派の駢文に対抗するため」（83頁）と述べている。第七章は、鈔本（写本）から刊本へと移行行く中での『史記』『漢書』について述べているが、「印刷術が普及した宋代に至って、本文と注釈とを合わせたテキストが一般的にな」（91頁）り、「やがては、『史記』本文と三家の注（集解・索隱・正義）までも合刻したテキストが刊行され、それが『史記』版本の主流とな」（92頁）った。両書の評価については、「韓愈らによる『史記』再評価を受けて、宋代以後は、『史記』の価値が高まりを見せ」（96頁）、「南宋の時代には『漢書』に対するきわめて厳しい評価があらわれる」（96頁）と指摘している。第八章は、「とりわけ明末に数多く刊行され、流行していた書物のスタイルである」（110頁）「評林」本から『史記評林』と『漢書評林』をとりあげ、編纂者の凌稚隆や明末の出版状況を紹介したあと、「日本の江戸時代、最も広く読まれた『史記』また『漢

書』が、まさしくこの「評林本」だった」(114頁)ことを述べている。また、『史記』は明代にもてはやされたが、清代の考証学において『漢書』が高く評価され、今日重んじられている清末の王先謙『漢書補注』に至っていることが述べられている。第九章は、これまでのまとめを述べたあと、現代日本においては「おおむね司馬遷『史記』一辺倒である」(121頁)ことを指摘しているが、最後の段落の文章がこの本の執筆意図をあらわしていて、まことに興味深い。最後の段落の文章(122頁)を引用する。

歴史の問題は、きわめて現代的な問題でもある。『史記』と『漢書』において、中国における史書の二つの流れを見ることができる。『漢書』以後、歴史(正史)は現在の王朝のためにこそ書かれてきた。そのことを理解する必要がある。本書において、あえて『史記』と『漢書』を取り上げたゆえんである。

なぜ、大木氏の手によって『『史記』と『漢書』』が執筆されたのか、これによって、明らかとなった。

第Ⅱ部は、『史記』と『漢書』の本文を読み、いくつかの問題について考察している。第一章では、『史記』伯夷列伝の文言を、文字どおり、分析し、伯夷列伝が列伝の冒頭に置かれた意味を考察している。歴史家の使命として、伯夷列伝を列伝の冒頭に置くことで、伯夷・叔斉のことを確実に後世に伝えられる、との司馬遷の意図をうかがっている。第二章は、『史記』と『漢書』に共通して見える項羽と劉邦の戦い(漢楚の戦い)における高祖劉邦の描き方を読み比べた章である。その中でも、同じ場面を描いた「漢王逃、独与滕公出成臯北門、」(『史記』項羽本紀)、「漢王跳、独与滕公共車出成臯玉門、」(『史記』高祖本紀／『漢書』高帝紀)、「漢王逃、独与滕公得出、」(『漢書』項籍伝)という「逃」と「跳」の違いについて考察している。「司馬遷は、劉邦の伝において「にげた」とするのを避け、班固は、あらゆる箇所において高祖劉邦が「にげた」とするのを避けて、「跳」に改めたことはまちがいない」(176頁)ことを確認し、「そこには、劉邦の行動をどう描くかの大きな選択があ」(177頁)り、「班固は、『史記』『項羽本紀』にもとづいて『漢書』『項籍伝』を書きながら、劉邦が「逃げた」ことにならないよう、わざと「跳」の文字に変えた」(181頁)としている。第三章は、上古か

ら秦までの人物を九ランクに分けて示した『漢書』『古今人表』をとりあげ、班固がなぜこのような人物評価をおこなったのかを考察している。後人のために善悪を明らかにすることを著作目的とした班固の意図を確認している。

以上、大木氏の著書について、内容を簡単に見てきたが、このうち大木氏の本領が発揮されているのは、宋代以降の出版文化をふまえた第Ⅰ部の第七章と第八章であり、この本の価値はここにある。そして、こうした成果は、出版文化への造詣の深さは言うまでもなく、漢代から現代までの2000年間の歴史的展開を追いかけてこそのものである。

その一方で、2000年間の歴史的展開の起点にあたる2000年前の状況について一定の理解がなければ、『史記』と『漢書』の本来の資料的価値を見失うことになってしまいかねない。そこで、以下では、後世の評価はひとまず置き、2000年前の起点に立ち返るために、これまで『史記』と『漢書』を用いてどのような漢代思想史研究がおこなわれてきたのかを紹介し、その後、あらためて『史記』と『漢書』からそれぞれの成立事情を瞥見しておきたい。

### 3. 『史記』と『漢書』を用いた漢代思想史研究

これまで、『史記』と『漢書』については、漢代思想史に関連して、どのような研究が行われてきたのであろうか。ここでは、紙幅の都合もあり、三つの研究を紹介するとどめたい。

まず第一に挙げるべきは、いわゆる「儒教の国教化」の問題をめぐる福井重雅氏の研究である。福井氏は、2005年3月、『漢代儒教の史的研究——儒教の官学化をめぐる定説の再検討——』（汲古書院）を上梓されたが、これは、福井氏が約40年の歳月をかけて、福井氏自身が提起した、いわゆる「儒教の国教化」に関する「定説」への疑義について、様々な角度から、証拠を積み重ねて論証していった、福井氏の執念的研究の集大成である。福井氏の問題提起は、1967年1月に発表された福井氏の論文<sup>2)</sup>にみえる次の文言に尽きている。

五経博士の設置や儒教の確立は董仲舒によるとする定説が、実は史記の記載の中には存在しないという事実を媒介として漢書を検証した結果、それらは

いずれも前漢末期に胚胎し徐々に醸成された儒家思潮の盛行によって、後から想像して付け加えられた理想的な伝承に過ぎない。

このことは、『史記』と『漢書』に同じできごとについて書かれているばあい、あるいは一方にそのことが書かれていないばあい、『史記』と『漢書』のどちらの記述を是認し信用するかにより、研究の立場が異なってくることを示している。福井氏の問題提起は、発表直後から数々の賛否両論を呼び、福井氏自身も、この自説の正当性を論証するために、自説を補強する裏付けとなる証拠を示す多くの論文を発表してこられた<sup>3)</sup>。そうした研究者たちの営為により、いわゆる「儒教の国教化」の問題については、漢代思想史上において、既に一定程度の役割を果たし終えた、と筆者は考えている<sup>4)</sup>。

二つは、『淮南子』の成立事情に関する研究である。これについては、池田知久氏がその著訳書『中国の古典 淮南子 知の百科』の「解説」<sup>5)</sup>において詳細に論じておられるのを参照していただきたいが、池田氏は、『淮南子』の成立を、上述したいわゆる「儒教の国教化」とほぼ同時かそれにやや後れるとした当時の有力学説に対して、『史記』と『漢書』の記述を検討した結果、淮南王が『淮南子』を「献じたのは、建元二年（前一三九）の入朝の折以外にまずありえないであろう」（18頁）とし、さらに、『淮南子』が「儒教の政治的優位の決まった建元五・六年（前一三六・五）、ないし儒教一尊の定令された元朔元年（前一二八。『漢書』武帝紀）以降には、成立しえないであろうことを示す記事が存在する」（20頁）ことを突き止め、むしろ『淮南子』の成立が「武帝の儒教一尊政策の展開に何らかの刺激を与えたであろう」（33頁）と述べて、従来の有力学説を完全に覆すに至っている。

三つは、『漢書』成立までの『史記』に対する評価をめぐる研究である。これについては、嘉瀬達男氏の考察をとりあげたい<sup>6)</sup>。なぜ、『漢書』成立までの『史記』についてなのか。それは、嘉瀬氏の言葉を借りれば、「『漢書』の成立を契機として、『史記』は正史または史部という範疇において論じられるようになる」（8頁）からである。つまり、『史記』は『漢書』の登場によって、その位置付けや価値付けが自ずとなされてしまうので、『漢書』の未だ存在しない世界における『史記』が、当時の知識人からどのように捉えられていたのか、この点をさぐる

ことこそ、史書という縛りから解き放たれた本来の『史記』の性格を描き出すことにつながるのである。嘉瀬氏が論文の冒頭において「そもそも『史記』は、成立した当初どのような書物として考えられ、受けとめられていたのだろうか。」(1頁)との問いを立てておられる所以である。嘉瀬氏によれば、漢代、『史記』は、『淮南子』と、また劉向と、また楊雄と比較されており、『史記』に雑家としての性格や諸子としての性格を見出だすことができる。また、『史記』成立後から『漢書』が著されるまでの間に、『史記』の続編が作られたこと(撰続)を紹介し、『史記』撰続の目的が鑑戒にあったのは、「撰続者たちが『史記』から継承したのは、史事を借りて鑑戒を示そうとする「一家の言」であった」(14頁)と述べている。『史記』の理解には多角的な視点が不可欠なのである。(15頁)という論文の最後の一文は、至極当然のことを述べているように一見思えるのだが、実は、漢代の知識人における様々な(というより一様でない)『史記』評価からは、『史記』の性格の捉えにくさをこうまとめるしかなく、最後のこの一文に結実したのだ、と筆者は考えている。

以上、『史記』と『漢書』を用いた従来の漢代思想史に関する研究を三つ紹介した。これらを踏まえたうえで、漢代思想史研究の新たな地平をもとめるべく、いま一度、『史記』と『漢書』の成立事情をうかがっておくことにしたい。

#### 4. 『史記』と『漢書』の成立事情

『史記』の執筆意図は、太史公自序に見える。

司馬氏世典周史。……太史公執遷手而泣曰、「余先周室之太史也。自上世嘗顯功名於虞夏、典天官事。後世中衰、絶於予乎。汝復為太史、則統吾祖矣。……余死、汝必為太史、無忘吾所欲論著矣。……。」……百年之間、天下遺文古事靡不畢集太史公。太史公仍父子相統纂其職、曰、「於戲。余維先人嘗掌斯事、顯於唐虞、至于周、復典之。故司馬氏世主天官、至於余乎、欽念哉、欽念哉。」……凡百三十篇、五十二万六千五百字、為『太史公書』。(司馬氏は代々周王朝の史官を担当してきた。……太史公〔談〕は遷の手をとって泣きながらこう言った。「わが祖先は周王朝の太史であった。遙か

遡ること虞・夏の時代に功名をあらわして以来、天官の仕事を担当してきた。そののち途中で衰微し、私でこの職務が途絶えるのであろうか。おまえも太史となって、私の祖先からの職務を継承せよ。……。私が死んだら、おまえはきっと太史となって、私が書こうとしたことを忘れるんじゃないぞ。……。」……。この百年の間に、世の中の古い文書や情報で太史公のもとに集まらないものはなかった。太史公〔遷〕は父子でその職務を継承し、こう言った。「ああ、私の祖先はこの職務をつかさどり、唐・虞の時代にあらわれ、周に至っても、この職務を担当した。それゆえ司馬氏は代々天官をつかさどり、私に至ったことを、つつしみおもうばかりである。」……。 (こうして) 合計130篇、52万6500字にものぼる、『太史公書』をつくったのだ。

これによれば、司馬家が代々王朝に仕えた史官であったこと、父・司馬談のことばが子・司馬遷を『史記』の執筆に駆り立てたこと、こうしたことが『史記』成立の大きな事情であったことが分かる。そこには、代々王朝の史官であった司馬家の私でなければこの書物を完成することはできない (私だからこそ著述を全うさせてみせる)、との司馬遷の自負があったに違いない。

他方、『漢書』はどうか。大木氏は、『史記』(『太史公書』)は班彪も班固も読んでいたわけであって、ある意味では、『漢書』という書物の誕生それ自体が、班固による『史記』との対話から生まれたわけである」(70頁)と述べているが、『漢書』叙伝下に見える、『史記』が意識された『漢書』の成立事情をうかがってみよう。

漢紹堯運、以建帝業、至於六世、史臣乃追述功德、私作「本紀」、編於百王之末、廁於秦・項之列。太初以後、闕而不録、故探纂前記、綴輯所聞、以述『漢書』、起元高祖、終於孝平王莽之誅、十有二世、二百三十年、綜其行事、旁貫五經、上下洽通、為春秋考紀・表・志・伝、凡百篇。(漢は堯以来の時代を受け継いで、帝国としての大事業をうち建てた。六世の武帝の時代に、史臣(司馬遷)は昔の人物の功績や人柄を叙述し、ひそかに「本紀」を作って、多くの王者のあとに置き、秦始皇帝や項羽らと同列に置かれることとなった。太初年間以後、(前漢の事実の把握が)不完全となって記録されないでいた。そこで以前の記録を突き止めて整理し、聞き知ったことを記録し



た簡を編綴し、そうして『漢書』を叙述した。(『漢書』は)高祖から始まり、平帝そして王莽の誅殺で終わる。12人の皇帝の治世、230年間にわたり、(前漢の)事実を総合し、五經にあまねく通曉し、上から下まであまねく精通しており、帝紀・表・志・伝で構成され、およそ百篇である。)

大木氏の本に「班固の『漢書』は、司馬遷『史記』の体裁から多くを学んでいる」(26頁)と記されるように、『漢書』が『史記』を襲っている部分は少ない。だからこそ、『史記』と『漢書』の比較研究<sup>7)</sup>が必要不可欠であることは言うまでもないのだが、すぐさま比較研究という手段を講じるのではなく、その前に、別の視点から『漢書』について考えてみよう。

たとえば、いま、『漢書』という書物の位置付けについて、この『漢書』叙伝下の執筆意図に基づき、正史という縛りを考えない地平で、『史記』を手本としたうえで班固独自の特色を加え、高祖劉邦から叙述を始めた『史記』の撰続としての『漢書』、という捉え方はできないであろうか。班固は父・班彪の仕事を受け継いだとはいえ、『史記』を意識して『漢書』を叙述したのであって、やはりこれも形を変えた『史記』の撰続ではなかったのか。

あるいは、『漢書』が著されたからといって、そこに画期を見出だしてすぐさま史書(正史)としての縛りをかけて捉えなくてもよいのではないか。史書としてではなく、単に当時の一次資料として、どれだけの資料的価値があるのかを見積もることが、むしろ重要ではあるまいか。

また、われわれが気を付けておきたいのは、班固はあくまで「漢」という時代を意識していた、ということである。それは、『漢書』が漢初から叙述されていることから分かるが、王莽から政権を奪還した光武帝に始まる後漢時代の初期は、漢王朝への賛美の意識が強かったはずである。その時代に生きていた彼のこうした意識をうかがうには、彼と同時代人の王充の『論衡』の記述などにつきあわせて考察しなければならないのであるが、これについては、別の機会に譲ることにしたい。

## 5. おわりに

以上、本稿では、『史記』と『漢書』をめぐって、大木氏の近著、従来の『史記』と『漢書』を用いた漢代思想史研究、『史記』『漢書』両書の成立事情をみたうえで、新たな研究の地平をもとめて、私見を述べた。

両書が漢代に成立してから約2000年が経った今日、『史記』『漢書』に関する研究の蓄積は膨大なものとなっている。それを博搜することは当然重要な作業であるのだが、2000年経っていても起点に立ちもどり当時の一次資料として虚心坦懐に読解することも不可欠である。大木氏の本を手がかりにして、あらためて、その事を認識させられた次第である。

高校での受験勉強をおえて大学生となった若者たちが、大学生のうちに、大木氏の本を読むことによって、『史記』や『漢書』の世界に親しみ、できれば、その先の一步を進めて中国学へ興味を持ってもらいたい、と切に願う。今回、『共通教育論集』に駄文を投稿した所以である。

2009年9月30日 攬筆

### 注

- 1) 同じ「書物誕生—あたらしい古典入門」シリーズで、平田昌司『『孫子』——解答のない兵法』（岩波書店、2009年4月）は、やはり中国語学研究者である平田氏が執筆者となっており、ユニークな試みとなっている。
- 2) 福井重雅「儒教成立史上の二三の問題——五経博士の設置と董仲舒の事績に関する疑義——」（『史学雑誌』第七六編第一号、史学会、1967年1月）。
- 3) 福井重雅『漢代儒教の史的研究——儒教の官学化をめぐる定説の再検討——』（汲古書院、2005年3月）に収載されている諸論文を参照。
- 4) こうした筆者の考えは、渡邊義浩編『両漢の儒教と政治権力』（汲古書院、2005年9月）の第二部の「合評会 福井重雅著『漢代儒教の史的研究』」の「討論」、筆者の博士論文『後漢経学研究序説』の第一章の第二節「役割を果たし終えた《儒教の国教化》説」、拙論「完成使命的《儒教国教化》学説——圍繞日本学者の議論——」（『紀念孔子誕辰2560周年國際學術研討會論文集（之四）』、2009年9月／2010年に正式出版

の予定)において、既に表明している。

- 5) 池田知久「解説 『淮南子』の成立——『史記』と『漢書』とを読んで——」(原載誌掲載は1980年1月／加筆修正・改題のうえ、池田知久著訳『中国の古典 淮南子 知の百科』(講談社、1989年6月)に再録)。
- 6) 嘉瀬達男「諸子としての『史記』——『漢書』成立までの『史記』評価と撰続状況の検討——」(『立命館文学』第590号、2005年7月)。
- 7) さしあたり、近年のまとまった著作として、樸宰雨『《史記》《漢書》比較研究』(中国文学出版社、1994年8月)を挙げておく。

〔附記〕 本稿は、平成21(2009)年度文部科学省科学研究費補助金(研究課題「後漢経学の基礎的研究」、課題番号21720014)における研究成果の一部である。